

何事もネガティブに考え、 妻との関係もよくないため孤独だ

5

相談者は、肺がんステージⅣと診断され、抗がん剤治療を受けた。夫婦関係や周囲との人間関係など、すべてがうまくいかず、孤独感を募らせている。

1 相談内容 60代男性 肺がんステージⅣ

相談者（60代後半）は、7ヶ月前に肺がんステージⅣと診断され、手術はできず抗がん剤治療しれないと言われた。末期で余命も保証できないと伝えられ信じられなかった。2週間後、V病院に入院して抗がん剤治療を受けた。薬の名前はあまり覚えていないが、がんは少しおさまったようだ。

かつては車の販売の仕事をしていたが、その後、施設で送迎の仕事をしていた時に父親が認知症になり、7～8年介護した。その過程で自分はアルコール依存症になり、夫婦の関係にも大きな亀裂がはいった。

現在、体調は落ち着いていて、3カ月毎に検査をしているが、医師や看護師とは人間としての会話は無い。知人や同僚にがんになったことを知らせたら、みんなに距離をおかれるようになり、自分は孤独で引きこもっているような状態だ。

親を見送り、妻とは一緒に生活をしているが、ちょっとしたことで言い争いが絶えず、妻はすぐ家出してしまう。少しの年金と妻のパート収入で生活しているが、自分のつらい気持ちをごまかすために、ついお金を浪費してしまう。妻が仕事に出たあとは1人ぼっちになりつらい。（涙を流しながら）何事もネガティブに考えてつらい。

2 相談内容のポイント

- 1 がんは少しおさまっているが、周りが引いてしまい、非常に孤独感がある。
- 2 いま生きている意味が見いだせない。
- 3 誰かとコミュニケーションを持ちたいと思っている。

3 ピアサポーターの対応のポイント

- 薬が良く効いて、いま体調が安定していることは本当にいいことだと伝えた。
- 病院内で実施しているピアサポート、あるいは名古屋市がん相談情報サロン・ピアネットなどのどちらでもいいので、気が向いた時に立ち寄り、ピアサポーターと話すことで気持ちが落ち着くと思うと勧めた。
- 奥さんはあなたのことが心配だから、家出をしても帰って来られる。あなたは一人ぼっちではないと伝えた。
- 何事も無理をしないで、少しずつ気持ちを立ち上げて行けばいいと話した。

4

ピアサポートの結果

奥さんの話をして「一人ぼっちではない」と伝えた頃から少し表情が明るくなりました。「1 日でも元気で長生きすることが妻孝行ではないだろうか。それを目標にして」と言うと、急に笑顔を見せ、「目標にしたい」と言われた。

表情が少し和らぎ、「また来ます」と言って帰られた。

5

対応したピアサポーターの所感

じっくりと話を聞きとる中で、なんとか気持ちを立て直してもらえよう努力したつもりである。根本的な解決にはならないが、ピアサポートの領分というものがあるし、一方で限界も感じる。

肺がんステージⅣというのはなかなか厳しい状況である。薬がよく効いているということだが、今後が心配である。そのことについて触れたい気持ちはあったが、「相談者の求めていることに光をあてる。求められていないことは不可侵領域とする」というピアサポートの原則に従った。正直、少しジレンマもある。

考察

この事例から学ぶこと

厳しい状況にある相談者に対して、生きる希望を見いだすことを支援するサポートのあり方、根拠のある情報提供の大切さ。

【事例の背景・ピアサポーターが知っておくことが望ましい情報や対応】

- ステージⅣの肺がんは、手術の適応もないため、これまでは緩和ケア（ホスピス）を勧めるしかなかったが、最近、肺がんのタイプによっては、たいへん良い分子標的薬ができたし、また、つい最近、これまでにない有効性を示す免疫療法薬ができたので、前向きに対応するよう励ますとよい。
- 新薬の治験は最新医療であるので、積極的に勧めてもよい。

【講評】

新しい治療法が幾つかできてきたとはいえ、ステージⅣの肺がんは非常に予後の悪いがんであり、医師側としても、標準治療で行われたこれまでの治療成績から得られた生存曲線を示しつつ、厳しい予後を宣告せざるをえないので、この相談者が落ち込まれたのは当然といえる。

このようなときにピアサポーターと相談できる環境が整備されているのは、たいへん良いことであり、事実、この相談者においても、表情が明るくなったことは、相談の結果であると評価できる。

保険適用になったばかりの新薬や、認可を求めて行われている有望な最新薬の治験に関する専門的情報などは、残念ながら、患者にもピアサポーターにも簡単に得られることはできないので、これらにつき相談できる窓口、例えば NPO 法人ミーネットの「がん専門医による相談と助言」などを把握しておき、そこへ紹介するのがよいと思う。